

全校の皆さん、おはようございます。

五月末の伊那谷の景色は、雪化粧をおとしたアルプスが濃密な緑を解き放ち、田植えが終わった水田には鮮やかな緑の絨毯がひかれています。

さて、皆さんは一休宗純という方を知っていますか。一休さんの愛称で親しまれ、アニメの主人公のモデルでも知られますが、実在した人物でもあります。

一休さんといえば、「とんち」を含め、様々な逸話が残されています。たとえば、棒きれの先にドクロ（骸骨）を提げて「めでたくもあり めでたくもなし」と詠んで京の町を練り歩いたり、知り合いから孫が生まれたかを尋ねたい言葉がほしいと頼まれ、「親死ぬ 子死ぬ 孫死ぬ」という言葉を書いたりなど、随分と奇想天外な言動が多かったそうです。しかし、一休さんの言動はどれも、人間の真理をついたものが多く、先ほどの逸話はどれも、諸行無常の理を問いかけたものです。

そんな一休さんの名言の一つに、「おさな子がしだいしだいに知恵づきて仏に遠くなるぞ悲しき」という言葉があります。

「仏のような幼子（おさなご）も成長するにしたがって知恵が出てきて、仏のような心から離れていく。これは悲しいことである」と、いうように無邪気であった私たちも成長するにつれて、自分の思いどおりにならないと腹を立てたり、身勝手な思いになったりする「自我」が出てきます。

昔、新聞の読者投稿欄にこんな記事がありました。投稿したのはあるお母さん。三歳の娘さんが、おやつが欲しいとせがんできた時のことです。冷蔵庫を見るとプリンが一つだけ残っていました。お母さんは、幼稚園に行っているお兄ちゃんが帰ってくるとケンカになると考えて、内緒で食べてしまうように娘さんに言い聞かせプリンをあげたそうです。ところが、娘さんは一口だけ食べると「やっぱりお兄ちゃんが帰ってきたら半分こして食べる」と残しました。その姿にお母さんはとても恥ずかしくなったという内容でした。

私たちも普段の生活の中で、自分の欲望につき動かされたり、思い通りにならない現実に対し、腹を立てたりすることがあります。しかし、知恵のついた私たちは「自我」に振りまわされながら生きていくことに気づきません。そんな私たち人間のあさましい姿を一休さんは自戒の念を込めて、先ほどの言葉をいったのではないかと思えます。

お母さんが娘さんの言動にハッとさせられたように、仏の心は、知恵のついた私の心に、内側から呼びかけています。